

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1992年に、イタリアの研究チームがサル脳の脳にミラーニューロンと呼ばれる特別な細胞があることを発見した。この細胞は、サルは自分が何かしているときだけでなく、仲間のサルがするのを見たときにも発火する。□1、サルは仲間の行為を目撃することによって、あたかも自分がするように感じるのである。サルにも共感能力があるのだ。でも、長年チンパンジーの研究を続けてきたオランダ生まれのフランス・ドウ・ヴァールは、共感と同情は違うという。共感とは、他者についての情報を集めてそれを他者と同じように感じるプロセスだ。同情は、さらに他者に対する気遣いと、他者の境遇を改善したいという願望を反映する。そして、サルには共感する能力はあるが、同情する能力がギハクだという。同情には、相手の置かれている苦境を理解する認知能力と、手を助けたいという気持ちが必要だからである。

典型的な例がアフリカのオカバンゴという大湿地帯に棲むヒヒで報告されている。ここは乾季の間は乾いた草原だが、雨季になると遠くで降った雨が川となって流れ込み、大きな湿原となる。ヒヒは泳ぐことができるので、ライオンなどの肉食動物に襲われたら、水に飛び込んで逃げる。でも、赤ちゃんを腹に抱えたヒヒの母親は、そのまま水に飛び込むので、赤ちゃんがおぼれ死んでしまうことがよくある。ヒヒは自分ができることが赤ちゃんにはできないと理解する能力が欠けているせいだという。へA

類人猿にはこの能力がある。オランウータン、ゴリラ、チンパンジーは、まだよちよち歩きの赤ちゃんが階段から落ちそうになると、事前に手を伸ばして支える。へビなど危険なものに近づこうとすると、あわてて赤ちゃんを引き戻す。明らかに、赤ちゃんには自分と同じ能力がないことを知っているのだ。チンパンジーは傷ついた仲間に近づいて、抱きしめたり、傷をなめたりすることがよくある。おとなに攻撃されてうずくまっている子どもに、別の子どもが手を伸ばして抱きかかえることもある。また、ゴリラは仲間どうしのけんかに介入して、両者をなだめ、傷ついたゴリラに顔を近づけることがある。これは仲間を慰める行為だと見なされている。とくに、けんかに直接関わっていない□Iが仲裁し、慰めるのは類人猿にしか見られない。へB

アフリカの中央部にそびえるヴィルンガ火山群でマウンテンゴリラの調査をしているとき、いくつかの群れに手や足のないゴリラがいることに胸を痛めた。これは、密猟者がアンテロープ類を捕るために仕かけた罠のせいである。針金で作られた輪に手足を取られ、吊り上げられて締めつけられた結果、手足の先が落ちてしまったのである。私たちは罠を見つけないで、それを壊して押収していたが、被害はなくなる。□2、ベートーベンと名づけた老齢のシルバーバック(背中の銀白色のオス)がいる群れには手足のないゴリラはいなかった。

それがなぜかを、あるとき私は目撃したのである。へC  
ゴリラたちが騒ぎ始めたので近寄ってみると、3歳の子どもゴリラが罠にかかり、手を吊り上げられて悲鳴を上げていた。輪が縮まって痛そうだ。でもこれはずすのは難しい。体を引っ張れば、ますます輪が縮まってしまい、□2、緩めることができなくなる。すると、ベートーベンは子どもを抱き上げて罠を吊り上げている枝を折り、それから輪をたわめて手を抜いたのである。何と、ベートーベンは子どもを抱き上げて罠を封じて上手に罠はずしたのだ。同じようなことは、動物園でも見られている。スウェーデンの動物園で、チンパンジーの子どもの首にロープが巻きついて苦しそうにもがいていた。□3、最年長のオスがやって来て子どもを抱き上げ、ロープを緩めてはずしたのだ。ゴリラとチンパンジーの成功事例から、彼らが物事を客観的に見る□IIと、子どもを助けたいと思う同情心を持っていることがわかる。へD

さて、では人間以外の動物は自分とは違う種を助けようとするだろうか。じつはその例がゴリラで知られている。1996年にアメリカのシカゴのブルックフィールド動物園で、ゴリラを見ていた3歳の男の子がうっかり身を乗り出し過ぎて、ゴリラたちと観客を隔てていた堀の中に落ちてしまった。コンクリートの床に身体を打ちつけて気を失った男の子に、ゴリラたちは興味を示して集まって来た。力持ちのゴリラのおもちゃにされたら、大けがをする。危ない！でも、飛び降りて男の子を助けようとする勇氣ある人はいなかった。飼育員たちはホースで水を勢いよくかけてゴリラたちを遠ざけようとした。すると、ビンティという名のメスゴリラが放水の雨を振り払いながらやって来て、男の子をやさしく抱き上げ、あやしながら運んでいって飼育員の出入り口にそっと置いたのである。

□3、ビンティはこの男の子の危機を悟って、ゴリラの手にかからないように保護したのである。いや、そんな認知能力があるわけではないという意見が相次いだ。ビンティは母親が育児放棄をしたために人間の手で育てられた。人形遊びもしたことがある。だから、自分が抱かれた経験から男の子を抱き上げたくなくて、あるいは人形遊びのような気持ちになつたに違いないという意見である。でも、ゴリラやチンパンジーの研究者は、ビンティがどうすれば男の子の危機を救うことができるかをきちんと理解して行動に出た、と考えた。私もその意見に賛成である。ビンティはわざわざホースの水を浴びながら男の子に近づいた。しかも、抱き上げるだけでなく、飼育員の出入り口まで運んだのである。自分の興味ではなく、どうすれば男の子が救われるかを知っていなければできない行為ではないか。

人間は、他の種の動物を助けることにとても熱心である。巣から落ちてもがいているひな鳥や、羽が折れて飛べなくなった鳥たちを見ると、大事に保護して餌をやり、飛べるようになるまで面倒を見る。傷ついたキツネやタヌキを見つけると、たとえそれが人間に害をなす動物であっても保護してナオしてやるうとする。こういった同情の能力があるからこそ、人間はペットを飼ったり、カチクの世話をしたりできるのである。それは、ゴリラやチンパンジーが持つ能力を人間が大幅に拡大できたからに違いない。

人間は共感や同情の対象を他の種に広げただけでなく、仲間に対してそれを強めたことに特徴がある。それは自己犠牲の精神に反映している。危機にある仲間を救うために自分のいのちを懸ける。□4、自分の子どもや近親者だけでなく、血縁関係のない赤の他人さえ身を賭して助けようとする。ブルックフィールド動物園でゴリラの群れに飛び込んで子どもを助けようとする人はいなかったが、もし子どもが川でおぼれそうになっていたら間髪いれずに大勢の人たちが飛び込むだろう。この行為こそ人間の社会力を強め、これまで地球上の新しい環境に進出するたびに危機を乗り越えてきた原動力といえる。

(山極寿一『森の声、ゴリラの目 人類の本質を未来へつなぐ』による)

※アンテロープ類……ウシ科に属する動物のグループの総称。ガゼル、インパラ、ヌーなどが含まれる。

問一 ― ①～⑤のうち、カタカナは漢字に直して楷書で、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 ― ① ④ を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかも イ たとえば ウ すると エ つまり オ しかし カ したがって

問三 ― a・bの意味として最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a ア 強くいきどおった。 イ 納得できず考え込んだ。 ウ 非常に心配した。 エ とても恥ずかしかった。  
b ア 利害関係を考えず。 イ 少しの間も置かず。 ウ よそ見をすることなく。 エ 相手の意向に関係なく。

問四 ― 1 「共感する能力」について、これがどんな能力なのか具体的なわかる表現を文中から三十二字で、「<能力。」につながる形で抜き出さない。

問五 次の一文は、へA<>>へD<>のどこに入りますか。記号で答えなさい。

【類人猿は、自分が関わることによって状況が変わり、苦境にある仲間の気持ちが和らぐことを知っているのだ。】

問六 ― I を補うのに最も適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 当事者 イ 目撃者 ウ 指導者 エ 第三者

問七 ― 2 「それがなぜか」について、ベートーベンがいる群れに手足のないゴリラがいなかった理由を、文中の表現を用いて三十字程度で説明しなさい。

問八 ― II を補うのに最も適切な言葉を、文中から四字で抜き出さない。

問九 ― 3 「ビンティはこの男の子の危機を悟って……保護したのだろうか。」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1) 「これを否定する考え」を述べた部分を文中から五十字以内で、「<という考え。」につながる形で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

(2) 「これを肯定する考え」を述べた部分を文中から四十字以内で、「<という考え。」につながる形で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。

問十 ― 4 「自己犠牲の精神」について、人間はどのようにしてこの精神を持つようになったと考えられますか。筆者の主張に沿って説明しなさい。

〔一〕 次の文章は、重松清『コスモス』の一節です。日系ブラジル人のお母さんと暮らすリナは日本で生まれ育った小学六年生。日系人や外国人に慣れていない同級生らの言葉で嫌な気持ちになると、下校途中の公園の池に、その言葉の数の石を投げ込んでいました。これを読んで、後の問いに答えなさい。

リナの家のカレンダーは、二ヶ月で一枚になっている。だから九月と十月がセットで、授業参観の日に印をつける前から、十月には印のついた日があった。

コスモス祭りだった。

〈なんでそんなに気に入ったの？〉

リナが訊くと、お母さんはコスモスのもう一つの呼び名を教えてください。

秋桜——秋に咲く、桜。

もともとブラジルの日系人には、祖国を象徴する桜の花に強い思い入れがある。お母さんも日本に来る前から「桜」という漢字だけは読めたし、書けた。日本に来て、日系人コミュニティの仲間たちと初めてお花見をしたときには、満開の桜の美しさに感動した。

〈でも、秋に咲く桜があるとは知らなかったから、びっくりした〉

「秋桜」の文字を初めて目にしたのは、カラオケのモニター画面だった。両親が帰国して少したった頃、勤めていた自動車部品メーカーの同僚と出かけたカラオケボックスで、誰かが『秋桜』<sup>※1</sup>という曲を歌ったのだ。

お母さんが生まれるずっと前に日本で大ヒットして、いまでも歌い継がれている曲なのだという。

隣に座った人が、お母さんにもわかりやすい日本語で歌詞を説明してくれた。

もうすぐ結婚して家を出る娘と、お母さんの歌だった。モニターにも、歌詞をなぞって、縁側で母と娘が話している映像が流れていた。サビの部分で、映像が一面のコスモス畑に切り替わった。その瞬間、まだ二十歳前のお母さんは大粒の涙をぼろぼろと流した。ふるさとに帰った両親の姿が、不意に思い浮かんだのだ。

〈べつに悲しかったわけじゃないんだけど、涙が止まらなくなってね……〉

そのときのことを語るお母さんの目は、うっすらと潤んでいた。

授業参観の当日、お母さんはブラウスとキュロットスカートで学校に来た。派遣会社に写真を登録したときと同じ服装だった。

リナが選んだ。いつものように、おめかしをするつもりだったお母さんに、いいからこれにして、と強引に決めたのだ。理由は説明しなかった。こういうときにはこういう服装がいい、お母さんの考えるお洒落な服は授業参観にはふさわしくない、まわりの人たちと服装が違って目立ちすぎるとよくない……というのを日本語で話してもお母さんには通じないかもしれないし、ポルトガル語で説明する自信もない。なにより、**1**した顔のお母さんに目立ってはいけない理由を訊かれたら、言葉に詰まってしまいそうな気がしたから。

でも、そのおかげで、授業前に教室に入ってきたお母さんは、メイクこそ派手だったが、それほど極端に目立つことはなく、教室の後ろに並ぶ保護者に溶け込んでいた。

**1**ほっとして授業を受けていたら、教室の後ろから、カシヤツという音が聞こえた。スマートフォンで写真を撮った音だ。それも連写で立てつづけに。ちょうど先生が板書中で静かなときだったので、音は教室中に響いた。

「すみませーん……」

女の人の声があった。決まり悪そうな、でも照れ笑いを浮かべているような、あまり真剣に謝っているようには聞こえない。そして、イントネーションが、微妙に、ぎこちない。

クラスのみんなは一斉に後ろを振り向いた——リナを除いて。

リナは机に広げたノートの一点を見つめたまま、身をこわばらせていた。声を聞いてすぐにわかった。ほんとうは、撮影の音が聞こえた瞬間から、覚悟していた。

おそろおそろ教室の後ろに目をやると、やはりお母さんは、まわりのお父さんやお母さんたちの視線を左右から浴びていた。みんな**2**していた。信じられない、という顔でもあった。確かに、授業参観中にスマホで写真を撮るなんてありえない。非常識すぎる。怒った顔でにらんでいる人もいた。

幸い、それ以上の騒ぎにはならなかった。先生は困惑しながらも授業に戻り、みんなも前に向き直って、お母さんはその後はもう撮影はしなかった。

〈ねえ、なんで写真撮ったの？〉

リナはその日のうちにお母さんに訊いた。

お母さんは〈ごめんね〉と、軽い失敗を謝るみたいに笑って、教えてくれた。

ブラジルにいる両親——リナにとってのおじいちゃんとおばあちゃんに、写真を送ってあげたかったのだという。

お母さんの両親は日本で五年ほど働いた。デカセギは、向こうの言葉でも *dessegi* で通じる。日本がひどい不況になって仕事がなくなつたのでブラジルに帰った。でも、まだ十八だったお母さんは、日本に残ることにした。結婚を約束した日本人の恋人がいた。喧嘩別れした格好で親子は離ればなれになり、お母さんと恋人の間にはやがて赤ちゃんができて、結婚をして、生まれた赤ちゃんはリナと名付けられたのだ。お母さんはいまは両親と仲直りして、ときどきメールのやり取りをしている。そのメールに添付して、授業参観のときのリナの写真を送ろうとした。

リナはこんなに元気で、大きくなって、学校に通っています——。

「ちょっと、自慢、したかったんだよね」

お母さんは日本語で言った。

この程度なら、ポルトガル語で言われても、リナにもわかる。でも、お母さんは発音がぎこちない日本語をあえて使って、もつとぎこちない発音でさらに続けた。

「ごめん、また引越し、するから」

惣菜工場そうざいを雇い止めになった。仕事は十月いっぱい打ち切られる。

昨日通告されて、今朝、授業参観に出かける前に、写真を撮ろうと決めた。

「2 だったら「自慢」じゃなくて「嘘」や「見栄」なのに。リナはすぐに思い、自分のほうが正しいとわかっていたから、なにも言わずにうなずいた。

〈ここで新しい仕事を探してもいいけど、もうすぐ冬だから、スキーできるところに行ってみる？〉

ポルトガル語に戻る。知らないよ、勝手にしてよ、とリナはそっぽを向いた。怒っているようで、怒っていない。あきれているようで、そうでもない。うれしくはない。でも悲しすぎるわけでもない。じゃあ、いまの気持ちはなんなのか。訊かれてもよくわからない。

ただ、「日本人離れ」というのは、こういうことなのか、と思うと、ちよつと背中がこそばゆくなる。だったら悪口じゃなくていいな、と頬をゆるめた。

授業参観中のスマホ撮影は、やはり参観後の保護者会では問題になったらしい。

あとで友だちから聞いた。先生がかばってくれたのだという。リナのお母さんは日本語や日本の社会の常識が苦手なのだと行って——「それでみんなも許してあげたわけ。よかったね」。

リナはその日、満月池で、いつもより遠くに、力を込めて小石を投げた。

放課後に満月池に寄るのも、あと何度あるだろう。もう、この街に帰ってくることはないだろう。いままでの街もそうだったように。

でも、いつか、五年後でも十年後でも、例のバラエティ番組で満月池の水が抜かれるときが来たら、テレビで観よう。<sup>③</sup>ドロの中から小石が見つかったら「それ、外来種だよ」とテレビの画面に向かって言っただけでもいいかな、と思う。

お母さんの両親からは、ほどなく返事が来た。

〈日本が懐かしくなったから、また遊びに行きたい、って。楽しみだね〉

富士山ふじさんに連れて行ってあげようかなあ、ディズニールンドがいいかなあ、とお母さんは張り切っていた。

でも、スマホの画面を覗くと、返事にはまだ続きがあった。リナにもわかる、簡単なポルトガル語のメッセージだった。つらくなかったら、いつでも帰っておいで——。

秋晴れの空の下に広がるコスモス畑は、期待していたとおりのスケールと美しさだった。

もつとも、人出の多さや野外ステージで繰り広げられるイベントのにぎやかさは予想をさらに超えていて、花の美しさを 3 味わう余裕はなかった。コスモス畑の中には縦横に遊歩道がつくられていたけど、ステージ付近では写真を撮る人が多すぎて、まっすぐ歩くのにも苦労する混み合いようだった。

〈どうする？〉

リナは屋台村で買ったシュラスコ※3のバゲットサンドを頬張って訊いた。

〈もつと向こうまで行ってみよう〉

紙コップを持ったお母さんは、口のまわりにドイツのクラフトビールの泡を付けたまま、河川敷の先を指差した。確かにゆっくりコスモスを眺めるには、広い会場のはずれまで行くしかなさそうだった。

屋台村に並ぶ移動販売車には、おなじみのお好み焼きやタコ焼きだけでなく、ブラジルのシュラスコやトルコのケバブ、台湾たいわんのタピオカにインドのカレーとナン、メキシコのタコス、韓国のチヂミ、ベトナムのバイン・ミー、ドイツのフランクフルト、フランスのガレット…世界中の食べものがある。

それがコスモス祭りの特色でもあった。「コスモス」はラテン語で「宇宙」を意味する言葉で、花びらが整然と形良く並んでいるところから、これはまさに秩序のある宇宙ではないか、と名付けられた。同じ語源を持つ言葉に「コスモポリタン」がある。国家や民族を超えた、同じ地球の仲間、世界市民、国際人——お祭りの実行委員会は、戦争や衝突の絶えない現実の地球が少しでも平和になってほしいという願いを込めて、世界各国の料理が味わえるよう、移動販売の業者に声をかけているのだという。

ゆうべリナは、お祭りのウェブサイトでそれを知った。出店する屋台を確認するだけのつもりだったのに、むしろそっちの方をじっくり読みふけてしまった。<sup>3</sup>

お母さんはなにも知らない。のんきに〈ここで朝昼晩を食べたら、一日で世界一周できちゃうね〉と笑うだけだ。教えてあげようかと思っただけ、やめておいた。そういうのをなにも知らないのがお母さんのいいところかもしれない、と思ったから。

代わりに、土手道を並んで歩きながら、ウェブサイトに出ていたもう一つの話を伝えた。

〈ねえ、知ってた？ コスモスって、もともと日本にあった花じゃないんだよ〉

〈そうなの？〉

〈うん。もともとはメキシコとか、中南米が原産なんだから——〉

ポルトガル語でどう言うのか知らなかったのだから、ここだけ日本語で「外来種だよね」と言った。

ふうん、とお母さんは相槌あいづちを打った。思ったほど驚かなかったし、喜ばなかった。「外来種」という言葉がよくわからなかったのかもしれない。

コスモスが日本に来て広まったのは明治時代のことだった。「秋の桜」でアキザクラと名付けられた。遠い外国から来た花に、国を代表する桜の名前を付けるとは、昔の人のほうがいまより大らかでカンヨウ④だったのだろうか。でも、同じように長い旅をして日本に来たのに、ナンベイカミツキガメやセイタカアワダチソウとしか名付けられなかった生き物や植物が、ちよつとかわいそうにもなった。

